

編集後記

○この夏の手仕事は蔦から。直売所で「ジャム用」とされたものは少し草臥気味。たつぷりの水でリフレッシュ。ヘタを取り、砂糖とレモン汁をまぶして一晩おいたのを、滲み出したシロップごと中火へ。姿形は変わりましたがアクが抜け、艶と透明感いっぱいの色も誇らしげなジャムと、そちらは願望をやや煮詰め過ぎの歌ができました。

(鈴木)

○生誕百四十年を迎える若山牧水を、十一月号の特集「一首鑑賞」に取り上げました。企画編集は五月からはじめ、十五名の会員に原稿をお願いしたところ快諾を得ました。一冊の歌集をじっくりと読み、深くその世界に浸ることは、新たな発見の旅でもあります。旅と酒と人をこよなく愛した牧水。その魅力がさまざまな視点から語られるものと期待しています。

(田中)

○余る世も赤い血潮をたぎらせて三葉躑躅のようでありたし

伊藤千寿子

幻桃七月号の一首です。お若い時から万葉集を学び研鑽をつまれた伊藤さん。一首には、しゅうせい歌人であろうとされる志が伝わります。このちは、姉と慕われた松村先生と浄土に咲く花々をお楽しみ下さることでしょう。

○冥福をお祈り申し上げます。(棚橋好) ○先日、関市の見知らぬ方から突然お電話を頂いた。中国の歴史に詳しい方で愛新覚羅溥儀氏の旧居を詠んだ幻桃誌の拙作を読んでのこと。たまたま関市の公民館などに送られていた幻桃誌に私の連絡先があったので思い立ち電話したとのこと。幻桃誌が多くの人に読まれていると分かり何か嬉しく、旧友のように話が弾んだ。

(蛭間)

○歌会では仲間たちの作品を鑑賞し、自分の感じたことや批評を述べる。また、自分の知らなかったことを知る機会でもある。先日の歌会で6月の6のつく日に白い紫陽花の花をトイレに吊るすと将来下の世話にならないという歌があつて、皆いいことを知ったと話し合った。知らない言葉に出会って辞書をひく、語彙や知識を増やす絶好の場所である。(藤田) ○二年前に植えた枇杷の苗が自分の身長を越えるほどになり、小さな実を付けたのは六月の梅雨入りの頃であつた。ちよつと青みのある果実をもいで、皮をむくとするりと剥けた。噛むとメロンのようにさくさくしているが、酸っぱくて実が少ない。枇杷にとってはまだ青春だ。自分にもこんな青春時代があつたか、と思っておこさせる味であつた。

(三崎)

○六月、幻桃ウェブサイトを見られた方から、立ち上げ以来初めてとなる入会申し込み

をいただいた。早速、関東地域世話人の蛭間さんへ連絡し、十一月号から、白桃集に出詠していただくことになった。少しずつだが幻桃短歌会の名が拡まるのは嬉しいことだ。今後も入会希望者が増えようサイトを作っていきたい。

(船橋)

○今号は、歌壇でご活躍されている歌人佐佐木頼綱、横山未来子両氏にご寄稿戴きました。佐佐木氏は四月の全国大会でお世話になりました。そのご縁から、横山未来子さんをご紹介くださいました。

○お二人の作品を幻桃誌上で鑑賞できることは、望外の喜びです。心よりお礼を申し上げます。

○故伊藤千寿子さんは、「幻桃」創刊からの会員で、編集・運営委員でした。晩年は顧問を務めてくださり、様々な困難に出合うと相談していただきましたが、俯瞰的な見地からお話してくださり、私にとって最も信頼できる方でした。今号に絶唱十首を出詠されてお亡くなりになり、片翼をもがれたような喪失感があります。多くの会員からも伊藤さんを悼んで、エッセイや選歌が寄せられました。

「幻桃」誌の三年分を作品集として選歌をお願いしましたが、伊藤短歌の真髄が少しでも皆様の心に届くことを願っています。

(編集・運営委員会 文責 太田)